

日本キリスト教会大阪北教会

2017年1月29日 聖日礼拝説教 牧師 森田幸男

聖書 ヨハネによる福音書15章18～25節

15:18「世があなたがたを憎むなら、あなたがたを憎む前にわたしを憎んでいたことを覚えなさい。15:19あなたがたが世に属していたなら、世はあなたがたを身内として愛したはずである。だが、あなたがたは世に属していない。わたしがあなたがたを世から選び出した。だから、世はあなたがたを憎むのである。15:20『僕は主人にまざりはしない』と、私が言った言葉を思い出しなさい。人々がわたしを迫害したのであれば、あなたがたをも迫害するだろう。わたしの言葉を守ったのであれば、あなたがたの言葉をも守るだろう。15:21しかし人々は、わたしの名のゆえに、これらのことをみな、あなたがたにするようになる。わたしをお遣わしになった方を知らないからである。15:22わたしが来て彼らに話さなかったなら、彼らに罪はなかったであろう。だが、今は、彼らは自分の罪について弁解の余地がない。15:23 わたしを憎む者は、わたしの父をも憎んでいる。15:24 だれも行っただけの業を、わたしが彼らの間で行わなかったなら、彼らに罪はなかったであろう。だが今は、その業を見たうえで、わたしとわたしの父を憎んでいる。15:25 しかし、それは、『人々は理由もなく、わたしを憎んだ』と、彼らの律法に書いてある言葉が実現するためである。

説教 『キリストと教会とは運命共同体』

◆わたしたちの人生が一つの出会いによって変わって行くことは、誰もが経験しているところです。しかし、出会いというのは予測ができません。正にある時に会うのです。実は私たちの教会の表に、年中いろんなお花が咲きます。でもなかなか花の名前をおぼえられません。去年の暮れにシクラメンという花に出会いました。それはマリエちゃんの御主人の実家、茨城から贈ってもらったものです。花卉は白とピンクで、葉っぱがハート形の緑と白で、素晴らしいです。

◆今日はそれを日曜学校へ持って行き、説教しました。聖書は山上の説教で、「野の花がどのように育つのか、注意してみなさい。働きもせず、紡ぎもしない。しかし、言うておく。栄華を極めたソロモンでさえ、この花の一つほどにも着飾ってはいなかった。云々」と言う所です。イスラエルでは、シクラメンのことを「ソロモンの冠」と呼ぶそうです。伝説ではソロモンがこの花に出会い王冠のデザインにしたそうです。イエス様もシクラメンを見ながら説教されたのかもしれませんが。

◆今日もまた日曜学校で新しい出会いがありました。柴田拓人君が同学年の戸坂君を誘って来ました。先週も西村祐衣ちゃんがお友達の竹田瑠依ちゃんを誘って来ました。日曜学校は新年早々賑やかです。この子供たちが、しっかりとイエス様につながって、その祝福に与ってほしいと切に願います。

◆と申しますのも、私自身、一つの讃美歌と出会って、教会に導かれ、今に至っているからです。実は先週の水曜日の午後には中学校時代のクラス会、新年会がありました。中学校卒業はもう60年数年前の事ですが、今もクラス会が続いています。集まったのは10人で、男の子が6人で、女の子は4人でした。私が大阪西教会に行きかけを作ってくれた西岡君が、東京から出て来ていました。3年生のクリスマスの季節に、西岡君が教室で昼休みに、歌った讃美歌106番「荒野の果てに…」が、心にとまったのです。「西岡、その歌、

何？」「これ、讚美歌やで。教会で教えてもってん。」「ふーん、そんなら、僕も教会に連れてって！」そのようにして、私は大阪西教会に導かれ、今に至っているのです。ところが、新年会で私の横に座った西岡君にその事を話しても、彼は全く覚えていないのです。出会いというのは、このようなものですね。ですから、自分では全く意識しないで、他人の人生の転機に関わっていることがあるわけです。それで、余り意識過剰になってもいけません、私達が、普通に暮らしていて、それが友人、知人、家族の、人生の機縁になることがあるのですから、わたしたちの普通の暮らしが、いいことに繋がっていけばいいなというふうな思いを持って日々を送りたい、そんなことを思いました。

◆それにしましても、近頃、自分が、今、このようにあるのは云々で、中学3年生まで遡りましたが、もっと、もっと、遡ることが出来ますね。この自分自身の出所の原点は、どこまで遡ればますね。結局神様の御心にまで遡れますね。新約聖書の最初に記されているのはイエス様の系図です。でも、これはイスラエルの先祖アブラハム、ダビデからキリストに至る系図です。ところが、ルカによる福音書が記す系図は、イエス様から逆に遡ってゆく。アブラハム、ノアも出てくる。そして最後、アダムまで遡ります。「そして神に至る」と云う系図です。皆さんも何度も聞いておられることですが、「マタイによる福音書」は、ユダヤ人のための福音書です。それに対して、「ルカによる福音書」は異邦人のための福音書です。系図を、アブラハムから起こすというのはユダヤ人にとっては意義ある系図です。しかし、それに対して、キリストからずっと遡って、神に至るのが、ルカによる福音書の場合です。これは単なる系図ではなくて、わたしたち各自が、今・ここにあるのは、本当に神様の恵みの御意志によっているという事を示す系図なのです。

◆恐らく、福音書記者ルカも、ある時、自分の人生を、ものすごく思い巡らしたのだと思いますね。そして、一人一人の人間、一人一人のアメリカ人も、日本人も、中国人も、メキシコ人も、みんな遡れば神様に至るのです。ですから、今、存在する人は、全て、神の家族なのです。ですから、本当にわたしたちはそのような者として、互いに神様の御意志によって、今ある事を許されているのですから、新しく生まれた、アメリカ大統領の取っている背作政策は、聖書の根本的な考え方に逆行しているように思われます。神様の御意思によらない存在というのは一人もないのだということを、わたしたちは肝に銘じなければならぬ。

◆今日の聖書の要点は、イエス様の御言葉の主旨は、説教題にもしましたように、キリストと教会とは、そしてわたしたち一人一人とイエス様とは、運命共同体であるということにあります。ですから、イエス様に起こったことは、必ず私たち一人一人にも起こるし、起こらなければならない、そういうことでもあります。18節に、「世があなたがたを憎むなら、あなたがたを憎む前にわたしを憎んでいたことを覚えなさい。あなたがたが世に属していたなら、世はあなたがたを身内として愛したはずである。だが、あなた方は世に属していない。わたしがあなたがたを世から選び出した。だから世はあなたがたを憎むである」とあります。22節には、「わたしが来て彼らに話さなかったなら、彼らに罪はなかったであろう。だが、今は、彼らは自分の罪について弁解の余地がない」とあります。また24節、「だれも行つたことのない業を、わたしが彼らの間で行わなかったなら、彼らに罪はなかったであろう」とあります。ですから、イエス様がお生まれになって、そして、語られたのは、神の御言葉であり、行われたのは、神の御意志、御業であります。このように身をもって、神の御言葉を

語り、神の御業を為されたのは、唯一人、イエス様だけだとの、イエス様の自己主張です。

◆この言動は、当時のユダヤの指導者たちには、許しがたい暴言です。妄言です。彼らにしてみれば、自分たちこそが、聖書の教えに生きる真っ当な民という、自負、自己主張があります。ですから、ユダヤ人以外を、「異邦人」と呼び、蔑視する言い回しがあるわけです。そこへ、神の御独り子、イエス様がお出でになって、行われた事、語られたことは、根源的なユダヤ教批判だったわけです。そして、主イエス・キリストの言動に引き付けられた多くの民衆が、その後に従って行くので、危機感を覚えたユダヤの指導者達は、何とかして、イエスを殺そうといたします。結局、主イエス・キリストは十字架に追いやられたわけです。キリストの御言葉、御業が、彼らに対する根源的批判になったわけです。主イエス・キリストの言動は一言で言えば、「愛」です。驚くべき愛・アガペーです。その言説が、歴史と伝統の中で歪んでしまった当時のユダヤ教批判となり、民衆にとっては、正に活ける神様の現在・現臨を感じさせるものだったのです。ですから、イエス様は根源的な宗教改革者だったわけであります。そのようなことでイエス様は十字架につけられることとなります。

◆ところで昨年9月に、日本キリスト教会近畿中会合唱団(略称:ニッキ・キンキ・コール)の発会式が当教会で行われました。主な練習曲はヘンデルの『メサイヤ』の中の「ハレルヤ・コーラス」とモーツァルトの『アヴェ・ヴェルム・コルプス』です。この『アヴェ・ヴェルム・コルプス』は3分5〜6秒で歌える短い曲ですが、筆舌で尽くせない名曲です。キンキ・コールに入団しておられない方々も、是非、ご一緒に歌って欲しい名曲です。この曲の歌詞は、カトリック教会における聖体拝領(私達の聖餐式)における祈りに曲を付けたものです。歌詞はラテン語ですが、凡そ、こういう内容です。

“有難きかな！ 処女マリアからお生まれになった真の御体！

われら人類のために、十字架で苦しみを受けられ、犠牲となり給いし、主よ。

その脇腹は刺し貫かれ、水と血が滴り落ちている、主よ。

われらの死の試練おいて、(今いただく、このパンと一つなる御体なる主よ！)

今、これに与ることが、御国にて与る御祝福の前味とならしめて下さい。

おお、優しきイエスよ！ おお、憐れみ深きイエスよ！

おお、マリアの御子、イエスよ。アーメン。

ですから、『アヴェ・ヴェルム・コルプス』は祈りなのです。イエス様に対する感謝なのです。この祈りに、モーツァルトが絶妙の曲を付けたのです。

◆この歌詞の中に、「死の試練において」という1節があります。わたしたちに色んな人生の試練があります。今日の聖書の1節からすると、「理由もなく、わたしを憎んだ」という他ないような試練があるのです。それが、正に、主イエス・キリストの十字架の苦しみです。そして、今日の聖書からすると、主イエスを信じる者が、このような試練に遭うことは必然なのです。18節で、イエス様はこう言っておられます。「世があなたがたを憎むなら、あなたがたを憎む前にわたしを憎んでいたことを覚えなさい。15:19 あなたがたが世に属していたなら、世はあなたがたを身内として愛したはずである。

だが、あなたがたは世に属していない。わたしがあなたがたを世から選び出した。だから、世はあなたがたを憎むのである」と。わたしたちはイエス様と一体なのです。そのイエス様が人のために十字架で苦しまれ、身代わりになってくださり、我ら友のために命をお捨てになって下さった。「だから、私が先に死の試練を受けたのですから、あなたがたにも、同じことが身に起こります。わたしが先に憎まれ、捨てられた、ということ覚えていなさい。私に起こったことは必ずあなたがたにも起こります。」このようにイエス様はおっしゃっています。

◆わたしたちは、今年に続き、今年も同じ主題聖句をいただきました。週報にある通りですが、「あなたがたに平和があるように。父がわたしをお遣わしになったように、わたしもあなたがたを遣わす。」この御言葉は、ヨハネによる福音書の一番最後にある御言葉です。イエス様が十字架で息を引き取られた後、3日目の夕方、弟子たちに現れてなさって、おっしゃった御言葉です。ヨハネによる福音書の20章19節です。「その日、すなわち週の初めの日の夕方、弟子たちはユダヤ人を恐れて自分たちのいる家の戸に鍵をかけていた。そこへイエスが来て真ん中に立ち、『あなたがたに平和があるように』と言われた。そう言って、手とわき腹とをお見せになった。弟子たちは主を見て喜んだ。イエスは重ねて言われた。『あなたがたに平和があるように。父がわたしをお遣わしになったように、わたしもあなたがたを遣わす』。そう言ってから彼らに息を吹きかけて言われた。『聖霊を受けなさい』。正にこれが恐れに閉ざされていた、ユダヤ当局に見つけ出されたら、十字架につけられると、正に「死の試練」に固まっていた弟子たちに、復活の主が現れてとおっしゃった御言葉です。主イエスの御言葉が彼らを取り巻く恐れを破ったのです。弟子たちは、恐れから解放されていきます。そして、弟子たちは、十字架と復活の主に結ばれて、信仰の道を歩んだのです。

◆私達は、各人各様に生きるわけですがけれども、楽な人生は一つありません。そして、イエス様はそれ必然だと言われます。それが、神様の御心なのだと言われます。だから、そんな試練は起こらないようにはなくて、死の試練は、必ず起こるのだから、それを通して、私たちは何があっても崩れない永遠の命に与る者とされているのですから、恐れずにこの道を歩み通してください。というのがイエス様の御言葉の主旨だと思います。この御言葉をしっかり心に刻み付けて今年の歩みを心して歩んでまいりたいと思います。

◆お祈りいたします。

主イエス・キリストの父なる神様。

あなたのみ心によってこの生を与えられたわたしたちであります。また御心によってあなたは、わたしたちを、御子イエス様を信じる信仰へと導き入れてくださいました。いま、その恵みを新たに覚え、心から感謝いたします。どうか、主に従ってわたしたちをあなたのため、また友のため、人のために身を捧げて惜しまぬ者とならしめてください。そして、この混乱する世界に、あなたによる平和がなりますように、御心に適う奉仕をなさしめてください。

この祈りイエス様の御名を通し、前にお捧げいたします。アーメン。